

農林水産政策研究所  
研究成果報告会



## 中国・ブラジルの食料需給

世界の食料需給の中長期的な見通しに関する  
プロジェクト研究（各国需給分析チーム）

【世界の食料需給の中長期的な見通しに関するプロジェクト研究の概要】

### （1）プロジェクト研究の目的 （平成20－22年度）

1. バイオ燃料向け農産物の需要拡大、干ばつなど異常気象の頻発などにより、近年世界の食料需給は不安定さを増している。また、将来的には、ブラジル、ロシア、インド、中国といった新興経済国の経済成長の影響も大きくなっていくものと考えられる。
2. このような世界の食料需給をめぐる状況の変化に対して、食料輸入大国である我が国が的確に対応し、国民への食料の安定供給を引き続き確保していくため、「食料安全保障課」が平成20年4月に設置され、体制の充実が図られたところ。
3. このような状況を踏まえ、食料をめぐる動向や世界の食料需給の見通しについて、途上国も含め、できる限り客観的な情報を収集し、必要な分析を行った上で、その結果を世界の食料事情の変化に対応した新たな食料戦略の検討に供するとともに、分かりやすく国民に対しても提供。

【世界の食料需給の中長期的な見通しに関するプロジェクト研究の概要】

(2) 各チームの研究内容

需給モデルチーム

・食料の輸入大国である我が国の立場を踏まえ、世界の食料需給の中長期的な見通しを行うため、20年度に開発した「世界食料需給モデル」について、22年度においては、21年度に引き続き、品目毎の予測の精緻化、バイオ燃料の改良等を行い、予定していた開発を終えるとともに、これに基づいて世界の食料需給の中長期的な見通しを実施。

各国需給分析チーム

・20年度、21年度に引き続き、世界各国の食料消費、農業生産、人口動態、経済成長、農地、水資源、品種改良等の食料需給の分析に必要な情報・研究論文等を、各国の大学・研究機関との国際的な研究ネットワーク等を活用して収集し、行政サイドが有する情報と合わせて世界の食料需給の中長期的な見通しの実施に必要な分析を実施。  
 ・22年度においては、世界の食料需給を見通すに当たって、各国情報として重要と思われる貿易量、貿易先国に関する中長期的な変化の見通しに焦点を当てた分析を行うとともに、3年間の研究成果を取りまとめ。

バイオ燃料需給チーム

・20年度、21年度に引き続き、世界の食料需給を見通す上で、無視することができない要因となっているバイオ燃料原料用の農産物の需要拡大が食料需給に及ぼす影響について定量的な分析を行い、その成果を中長期見通しに組入れ。  
 ・22年度においては、バイオディーゼル用農産物に関する定量的な分析も実施し、3年間の研究成果を取りまとめ。

【世界の食料需給の中長期的な見通しに関するプロジェクト研究の概要】

(3) プロジェクト研究の推進体制

【各国需給分析チーム】

チーム長 清水純一

中国：河原昌一郎  
 韓国：會田陽久、樋口倫生  
 台湾：樋口倫生  
 タイ：小林弘明（客員：和光大学教授、現千葉大学教授）、古橋元  
 ベトナム：岡江恭史  
 インドネシア：黒木弘盛  
 インド：藤田幸一（客員：京都大学教授）、岩本隼人  
 アフリカ：櫻井武司（客員：一橋大学教授）  
 米国：小泉達治、勝又健太郎  
 カナダ：加藤弘二（客員：宇都宮大学准教授）  
 ブラジル：清水純一  
 アルゼンチン：馬場範雪  
 EU：松田祐子  
 ウクライナ：山村理人（客員：北海道大学教授）  
 ロシア・旧ソ連(CIS)諸国：野部公一（客員：専修大学教授）

所長・次長  
 企画広報室  
 政策研究調整官・調査官  
 食料・環境領域長

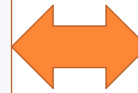
【需給モデルチーム】

チーム長 上林篤幸  
 小泉達治  
 古橋元  
 吉田行郷  
 加藤信夫  
 田中耕一郎

【バイオ燃料需給チーム】

チーム長 小泉達治  
 古橋元  
 清水純一  
 上林篤幸

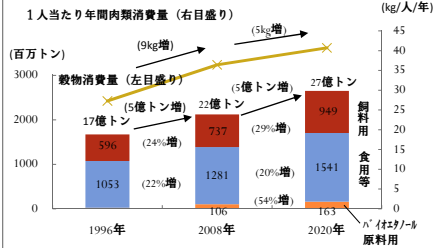
行政部局  
 大臣官房食料安全保障課等



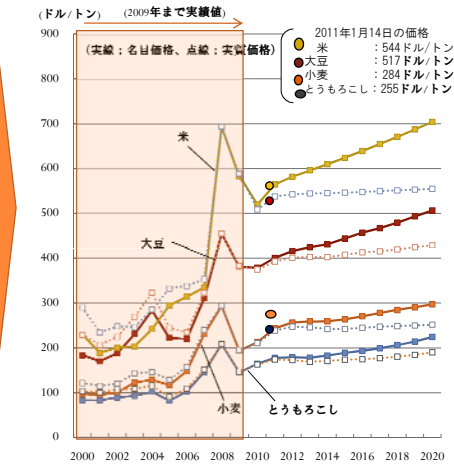
【世界の穀物等の需給見通し】

- 1 人口増、所得向上、飼料用、バイオ燃料向け需要増等に伴い、世界の穀物消費量は増大。
- 2 穀物及び大豆の価格は、2007年以前に比べ高い水準で上昇傾向で推移。

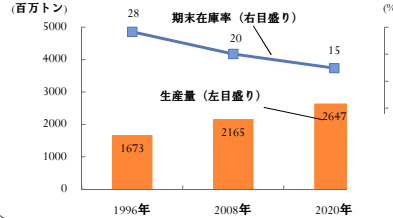
① 穀物消費量と1人当たり年間肉類消費量が大幅に増大



③ 穀物及び大豆の国際価格は2007年以前より高い水準で上昇

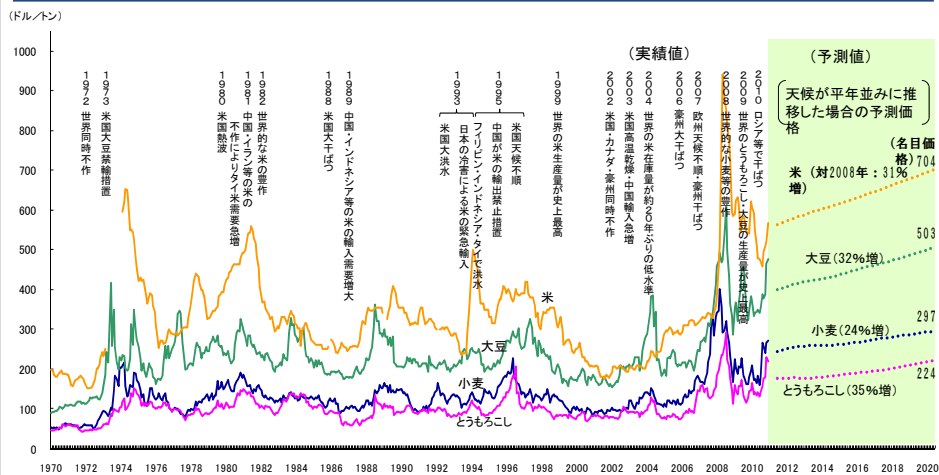


② 穀物生産量も増大するものの期末在庫率は低下



【穀物等の国際価格の長期的な動向】

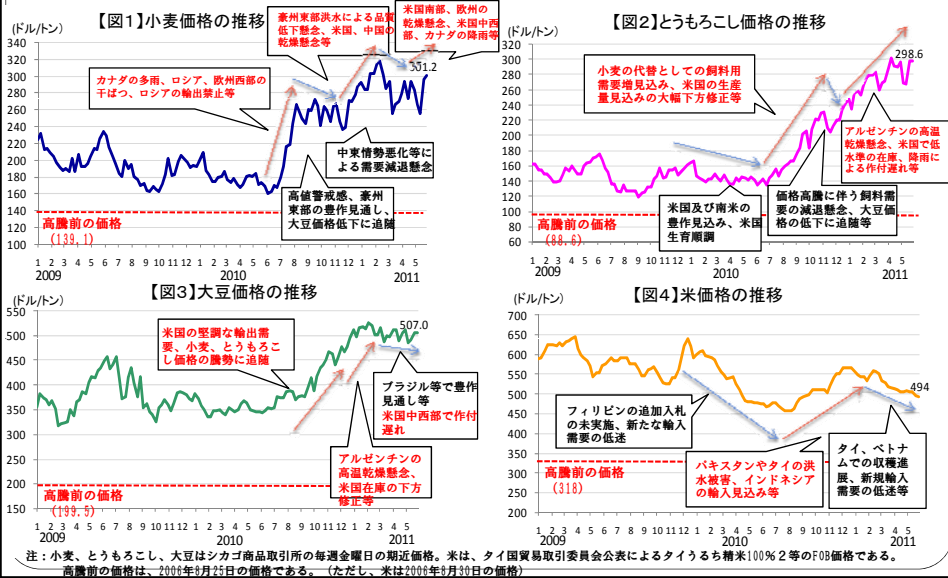
- 1 穀物等の国際価格は、長期の月次データで見ると、天候不順等の影響により、これまでも騰落を繰り返してきた。
- 2 2006年に上昇を始め、輸出国の輸出規制等により急激に高騰した2008年夏以降一旦落ち着いたものの、2010年7月以降再び上昇。



資料: ロイター・ES=時事、農林水産政策研究所「2020年における世界の食料需給見通し」  
 注: 小麦、とうもろこし、大豆の実績値は、各月ともシカゴ商品取引所の第1金曜日の期近価格である。  
 米の実績値は、タイ国貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格である。

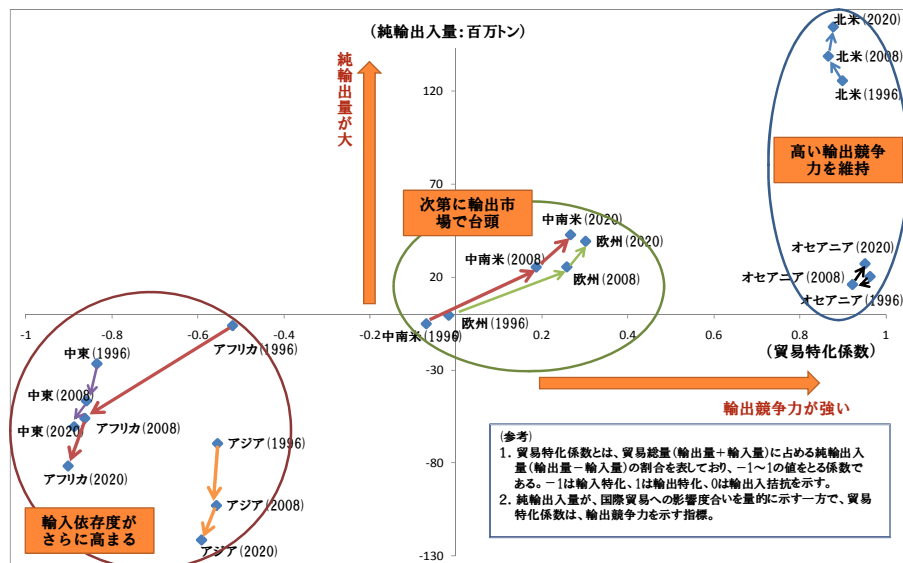
【最近の穀物等の国際価格の動向】

- 2010年7月以降、ロシアの穀物輸出禁止措置、とうもろこしのバイオ燃料向け需要の増大、中国の旺盛な大豆輸入等により、穀物等の需給は引き締まり上昇。とうもろこしは、需給逼迫懸念から2011年4月11日に305.5ドル/トンと史上最高値を更新。
- 現在、米国中西部の降雨によるとうもろこし等の作付遅れや、欧州の乾燥による小麦等の作柄が懸念。
- 一方、米は、パキスタン、タイの洪水等で2010年8月以降上昇したものの、その後は低下傾向で推移。



【穀物及び大豆の地域別貿易構造変化の見通し】

地域別貿易構造は、①高い輸出競争力を維持する北米、オセアニア、②輸出市場で台頭する中南米、欧州、③輸入依存度を高めるアフリカ、アジア、中東に三極化。



【穀物及び大豆の新興国BRICs等における貿易構造変化の見通し】

①アジアでは、中国が純輸入量を拡大、インドは輸出国の地位を維持、②欧州では、ロシアが純輸出量を拡大、EUは純輸入量を拡大、③ブラジルの純輸出量は伸び悩む見通し。

